

らない。やはりシベリアボケか？

身も心も疲れているのだ。その後一か月して耳鳴りがし、その後の一か月は仕事も手に付かず休養し体重は、七一キと約三割ほど太った。

復員後三か月後に誌した感想記をもとに書きました。

## 王道楽土であった「はず」の満州

山形県 大場 国治

満州は昔、日露戦争当時からのごく呼びなれた土地でした。ことに私どもが幼少のころの昭和六年七月にいわゆる満州事変が勃発して以来、一段と身近なものとなりました。

戦火も一応おさまり、昭和八年十二月二十三日には皇太子殿下（現天皇）の御誕生で日本国中が沸き上がりました。翌九年は東北地方の大凶作で冷害が特にひどく、私ども農家には一大悲劇が起りました。とても忘却はできません。私は小学校六年生でしたが衣食住において

は最低の生活でした。千秋の思いで待っていた一晚泊まりの遠足は中止になり、最大の楽しみにしていた、海を見ることができませんでした。貧農で小作農の分際だが、親は教育の念厚く高等小学校に進学させて下されました。俺たちはなあ、いくら難儀をしてもよいから、お前たち兄弟二人だけは立派になってお国のために尽くすのだぞと言う、あの親の言葉が今なお脳裏に残ります。

昭和十年三月二十三日、晴れて卒業して青年学校に進学しました。あのころから日本政府も目をつけたのが満州でした。国防と食糧増産が最大目的で、いわゆる国策だと称して、移民熱が沸き上がりました。

楽土沃野、新天地は招く、という宣伝でいやがうえにも若い我々の血を沸かせたものです。次男坊の私も村の同志六、七人とともに満州開拓少年隊（のちに、だれいとうとなく「昭和の白虎隊」ともいわれました）に応募しました。

そして昭和十二年九月一日に我が家を出発しました。

皇居前の広場で弥栄を三唱し、大谷尊山拓務大臣私邸でお言葉を頂き、敦賀の港から秋雨けぶる日本海を一路、

天草丸は清津港へと船出しました。生まれて初めて見る日本海の大海原、「海は広いな大きいな」と甲板で歌うあの気持ちは格別でした。小学校で休憩したあと、大型の列車は一路新京へ。新興都市新京の街は目を見張るものあり。関東軍司令部の屋上では植田謙吉閣下の訓示あり、参謀の石原完爾殿もまた北辺防衛とあわせて開拓の使命重大なりと説く。

いよいよ使命重大なるを自覚しながら、北上しハルピン郊外の訓練所に着いた。途中、道ばたに子供の死体が捨てられて真っ白く仰向けになっている。ああいよいよ満州だとの実感をおぼえた。一望千里の広漠たる大平野、目的地は北の果て嫩江でした。かつては討匪行で有名な多門師団を苦しめた馬占山で知名度の高い沃野が我々を待っておりまして。守備隊に守られてはおりましたが、自衛の任も重大でした。

昭和十三年新年早々に、トラクターのパイロット養成者の試験に合格して、虎林（当時、黒頭子）の山奥に出張した。

国境の山は厳しく、聞けば匪賊の巢窟だという。あた

かも独歩の守備隊は時任隊で兵隊のほとんどは山形県出身者でした。ここでの仕事は軍倉建設用に使用する木材運搬で、米国製の大型トラクターを使用した。原始林の大木は厳寒の山に立っており、正に雄大である。原始生活そのままに、祖国のためとはいいながら、若いみそらの少年隊員三六人「日本男子ここに在り」と威張ってはみたものの、夜ともなれば山では匪賊のたき火と弾の音、討伐隊は連日のように出勤して下されました。あらゆる苦難も突破して、五月初めに無事に一応の修業も完了して、いよいよ大型農機による開拓作業が日夜を問わずに行われた結果、七〇〇ヘクタールの農地も首尾よく完成しました。

昭和十五年五月二十六日、待望の徴兵検査が嫩江三宮部隊において行われました。いかめしい軍人の高官ばかりで身がしまります。検査の結果は甲種合格でした。身長一<sup>ナ</sup>七二、体重六八・五<sup>キ</sup>でした。おお立派な体格だのお、頑張れよ、とのお言葉は大佐だったので、多分三宮部隊長殿であったと思います。

さらに昭和十六年三月四日、広島西練兵場集合、入宮

の現役召書を胸に秘めながら、再検査を受けたのだがこれまた首尾よく合格。「検査パス、あす発つ」との電報は一瞬にして親の元に飛んだ。国家の干城となつたわが子の晴姿を涙で喜んだという。

夕闇迫るころ沖合の利根川丸（八五〇〇ト）に乗った。一路羅津行きだと聞く。三月十日夕刻ごろ冷たい小雨の中、軍用列車は林口駅に停車した。関東軍の最精鋭だという独立守備隊、全くその通りで気合いは十分入ります。

中隊前の舎前には剣術、射撃優秀中隊の棒杭が二本立っている。「協同一致は戦闘の目的を達するために極めて重要な事」部隊長陸軍大佐名越透の訓示要旨、「和親団結、重き石は進んで持て」とある。「上下一致して王事に勤勞せよ」、汗の初年は続く。

「命令を達する」、昭和十六年十二月八日早朝、命令会報係の佐藤恵之助曹長のカン高い声。「本朝未明、大日本帝国は米英両国と交戦状態に入れり」「全軍一致協力して目的達成のために邁進すべし」。身も心も引き締まります。

以後、我が部隊も昭和十八年十一月末日に部隊長浜野

正己陸軍中佐の第一陣は、私ども三年兵を残留したままサイパン島守備に南征したのでした。私は持ち前の特技が通訳でしたので最後まで残務整理に残り、翌十九年四月十日の夕暮時に残る四年兵全員、部隊長松永英雄陸軍中佐はモロタイ島に転戦した。ああ関東軍の精鋭も次第に影をひそめます。一応の残務も終了したころ五月二十七日、特技保持者と軽病の二十余人は国境の虎林七一二部隊に転属となりました。部隊長は多田欣次陸軍大佐でしたが主に四国出身の方々でした。

各戦線の悪化にともない栄光の関東軍も色彩なく隠し切れない思いがつのころ突如命令下達になり、私はあくまで在満希望を述べたが、とても受け入れては下されなかつた。任地は東京麻布近歩七連隊の要員でした。緊急のため人選に苦慮した由で、本部動員室の佐々木俊光大尉が直接私に要請され頼むの一点張り、実兄が憲兵で近くに勤務していたのを承知していたとのことでした。御守衛の任務は重大だぞ、目を光らせての説得ぶりに私はついに承知しました。

軍用列車は昭和十九年九月三十日正午品川駅に滑り込

んだ。駅近くの竹田宮邸にて昼食をいただき、師団長、赤柴八重蔵中将閣下のお迎えをいただき無事に麻布の兵舎に落ち着いた。即日天皇陛下の御名代の賀陽若大尉の宮様のもとで真新しい軍旗の拝式兼入隊式が厳粛にとり行われました。

「近衛歩兵第七連隊のため軍旗一流を授く、汝等軍人協力同心一致して、益々威武を宣揚し、以って帝國を保護せよ」誠に名誉この上なく、ますます尽忠報国の念は燃え上がる。以後において何回も竹の園生に参内したり、各宮邸の御守護の大任、水呑み百姓に生まれながら、軍服を着用しただけでこの幸せ感<sup>①</sup>は終生の宝と思いつづけている次第です。

翌二十年春四月、再渡満して開拓地に到着、翌日、即日山形連隊に応召の身となり、終戦は山形も有名な血染の桜の台のもとで詔勅拝読でした。

## 我が軍隊生活の回顧録

岐阜県 村橋 義雄

### 初年兵時代

昭和十八年九月末、地方の高等商業を卒業し、当時大阪に本社をおいていた某商社に就職し、前途に洋々たる希望をもっていた折も折、突然、学徒出陣の命が出された。昭和十八年十二月一日、兵庫県加古川北方の戦車十九連隊（中部四十九部隊）に学徒兵の一員として入隊した。小生にとって幸運だったことは全員が学徒兵であったため、初年兵教育はかなり手心を加えて行われた。しかし小生のごとく商科系の者にとって数学を中心とした戦車教育過程は誠に苦手で、小生の知能を最大限生かせる経理部幹部候補生に目標を定め、日夜寸暇を惜しんで勉学に励んだ。

最初は今回の入学学徒全員（但し幹候無資格者を除く）がまず経理部の試験を受けるよう指示があり、総勢約九